

Fate/Grand walker

シルムガル氏族のゾンビ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人理崩壊現象に目をつけたプレインズ・ウォーカーがグランドオーダーに同行するお
話。それとぐだ男君は灯を持っていました。

ぐだ男君の使えるマジックの呪文はスタン環境から徐々に遡っていきます
現在は現行スタンデッキのみ

第一章よりフロンティア環境まで増やします。

型月にあわせてマジックの呪文を解釈します。

強さの目安

サーヴァントの平均パワー／タフネス＝4／4ぐらい（バニラモンスターとして見た

場合

目 次

フランス / France	66	74	15	1
聖杯 / Chalice				
修業 / Disciplining				
カルデアにて / Interlude	45	34	26	
決闘 / Duel				

灯の目覚め／ignition

やあ、初めまして。

いきなりで申し訳ないけれど自己紹介をさせて欲しい。私の名前は『ローザ』。魔術師だ。遍く広がる多元宇宙に存在する次元を自由に行き来する特別な力を持つている。

私のような存在を人は「プレインズウォーカー／Plane Walker」と呼ぶ。いかに優秀な魔法使いがいかに努力や訓練を積もうとも、素質がなければプレインズウォーカーになることはできない。その素質は「灯」と呼ばれており、幸運にも（もしくは不幸にも）それを覚醒させた者だけが、プレインズウォーカーとなることができる。

私は幸運にも「プレインズウォーカーの灯／Plane Walker, s Sparker」をもち、不幸にもその灯を灯すことが出来た魔術師だ。そこで初めて私は「多元宇宙／Multiverse」を知り、「次元／Plane」を知り、「久遠の闇／Bind Ethernties」を知り、マナのなんたるかを知り、強大な魔術師となつた。プレインズウォーカーの灯を持たなくとも強力な魔法使いになることはできるし、たとえ魔法使いでなくても灯を持つことはできる。私は後者だった。

自己紹介はこの辺にしておこう。まあ要するに次元を超えることが出来るすごい魔

法使いだと思つてくれればそれでいい。

ん？ 私が使う魔法か？

私が扱う魔法は主にマナを用いる。マナは土地に宿り、土地の影響を受けて色づく。その色は五色。純真無垢なマナを含めれば六色だな。それらを用いてことで呪文を唱え生物を召喚したり、魔法を行使する。また、マナは移ろいややすいものだが、我々プレインズウォーカーの行使する魔法の中にはマナを固定させて永続的に効果を発揮させるものもある。もちろん、相手の魔法に使われるマナに干渉して魔法を打ち消すことも可能だ。

無論、マナが無ければ魔法は使えないしマナが不安定なところでは呪文を唱えることも困難になる。また、土地の影響を受けて変質したマナによつては呪文を強化してくれたり、反対に特定の呪文にしか用いれないようなマナもある。

そんな感じの魔術師な私だが、プレインズウォーカーの中で特に秀でているのはマナの扱いであろうと自負している。マナの量でも質でもなく、マナそのものの扱い方には自信があるのだ。灯が灯つた原因でもあるのだが、久遠の闇に赤ん坊のころに放り出されたせいで、体に多大な量の無色マナが宿つており、色も自在に着けられる。

反面不得手なのはライブラリー……ああ、君たちにわかりやすく言えば記憶の中にある呪文、あるいは魔法書の整理だ。おかげでマナは潤沢なのだが、呪文が唱えられない

事が多い。それを補うべくクリーチャー……所謂生物になる土地とも繋がりを持つている。

その昔は自分で作つた次元に引きこもつていたが、マナが変質してしまつた今ではそれも不可能だ。寝なきても食事をしなくてもよかつたのに、まあ不老不死ぐらいは魔力でどうにかなる。大量のマナを纏い続けた結果いつの間にか魔力もえらい量になつたからな。

ところで話は変わるが、今私はある次元にいる。マナが異常に偏つてゐる所為で、普通の魔術師ならば魔法の行使にムラが出来るだろうが、私は問題なく行使ができる。故にやたら襲い掛かつてくる木端魔術師を蹴散らすことは容易い。身の程を弁えていただきたいものだ。

それよりもクリーチャーにもならんほどに弱いというのがいただけない。恐らくこの次元でクリーチャー化できるのは数えても数体ぐらいればいい方だろうな。何体かは破格の性能を誇つてゐるので是非とも魔導書に加えたいところではある。あの結晶の塊とかいい感じに多元宇宙向きの性能をしている。「伝説のクリーチャー／Legendary Creature」だろう。この次元の魔術師では荷が重いだろうな。やり方がまるで違う。工夫さえすればあのエルドラージの巨人達でさえ殺されるのだ。

しかしこの次元の生活はなかなかに楽しい。テーロスのような神話があればイニストラードに居そうなクリーチャー、果ては灯を使わずとも次元移動をする道具を持つ者もいる。あの宝石術士はいずれ自身の中の灯に気づくだろう。楽しみだ。

「ん？ なんだ？ マナが一気に膨れ上がった？」

この感覚は前にも感じたことがある。次元の大穴を修復する前、星靈龍が復活する直前に感じたあの感覚だ。程なくして私の視界が焼かれていく。咄嗟に周りのマナを作して私と言う存在を保護する。荒れ方が尋常じやない。ゼンディガードもまだ落ち着いている方に感じてしまう。仕方がなしにこの次元を離れて、私の本拠地ヘプレインズウォーカーし、観測機を用いて先程までいた次元を観測する。

「ある一点を除いてマナが荒れ狂つていて観測が困難か……。なるほど、なかなか面白い状況じやないか。久しぶりに冒険心にギュンギュンくるぞ！」

さらに観測点での変化を観測する。これは……時空間転移か？ いや違う、これは次元移動だ。精巧な次元のコピーが行われている。それに加えて次元同士が干渉し合っている……いや、共鳴しているのか？ 似たようなことを見た気がするぞ？ あれはええと、ミラディンだつたか？ ファイレクシアによつて浸食を受けたあの次元と似たようなことを行つてゐるのか？

「非常に興味深い事象だ。なんとかあの次元へ渡れないものか……」

ふと、観測機が何かを観測した。ちいさな次元の方に穴が穿たれて何かが引っ張り出されているようだ。

「僕偉だ！　これならばあの次元に負荷をあまりかけないで移動が可能だ！」

私のプレインズウォークは実際にシンプルだ。次元座標を脳裏に記憶し、集中するだけだ。一瞬で私の周りに纏わりついていた空気が切り替わる。私の本拠地の快適な空気は灼熱を帯びた熱気に変わり、濃厚な死と破壊の気配で満たされ、ヘドロの中に放り込まれたように生者への怨念が纏わりついていく。

「ははは！　これは上質な黒マナだ！　周りの炎から赤のマナも出てくるか！　ふむ、完全に白と緑のマナは消えてしまつているな。まあこのような環境では仕方がないだろう」

さて、私の周りにいるこのスケルトンどもをまずは片づけるとするか。ふむ、性能が不明な以上、いろいろ試すとしよう。おまけに数も多い。仮に一体一体のパワーとタフネス……膂力と耐久力が一般人並であつても数の暴力で押し潰されることはよくあることだ。

「……ん？」

よく見れば十字架のような装飾のついた大盾を振るう少女と、彼女に指示を出す少年。そしてその後ろで小さくなっている銀髪の少女が見える。ふむ、白マナの気配がす

るという事は良くも悪くも善人のはずだ。私自身進んで悪いことをするときもあるが、理性があつて意思の疎通が可能な方の味方でありたい。であれば加勢するか。

脳裏に浮かぶ大図書館から魔術書を取り出す。それは私の手の中に落ち、一人でにページがバラバラに飛び交う。ページが飛んだことで少年たちも私の存在に気が付いたようだ。

〔島／I s l a n d〕

ページに記された土地との繋がりを現す呪文が青く光る。これで私は繋がりを持つた土地からマナを引き出すことが出来るようになる。普段なら有色マナを自在に出しことができるが、コピーとはいえ新しい次元に変わりはない。正しく魔術を行使できるか検証する意味合いもかねてオーソドックスな方法をとることにした。

〔飛行／F l i g h t〕

私自身に術をかけ、飛行能力を得る。弓を持った個体もちらほらいるが、当たる前に彼らのところへ飛べばいい。大盾を持った少女が私を迎撃しようと構える。うむ、良い判断である。

「待て、疑うのは当然だが敵ではない。どうか武器を向けないでくれ」

「そういわれて、『はい、そうですか』と武器を下ろす人はいません」「最もだ。だが、私自身に敵意はないのでね」

周りに舞うページの中から1つ選びとり呪文を唱える。

「稻妻／Lightning Bolt」！

辺りの炎から発せられる潤沢な赤マナを用いて、私の掌から発せられた稻妻が少女と少年の間を抜け、銀髪の少女の後ろにいたスケルトンを吹き飛ばす。跡形もなく吹っ飛んだところからして、このスケルトンたちのタフネスは訓練された象以下のはずだ。最初からこのあたりに浮かんでいたマナであつたならば使わないという選択肢はない。

「そら、前だけ見るのは危険だぞ？」

再び島の呪文を唱え、青マナを発生させる。あの銀髪の少女の守りが必要だろう。

「濃霧の層／Fog Bank」

青い霧が召喚され、銀髪の少女を守るように包み込む。

「所長！」

「大丈夫だ。あの霧が守ってくれる。どんな攻撃だろうと問題はない」

まるで質量を持つたように攻撃を霧が弾いていく。濃霧の層はあらゆるダメージを軽減する力があるのだ。もつともこれでも力の一部を再現しただけに過ぎない。

「援軍を出すぐ。上手く使いたまえ」

周囲に浮かぶ赤マナを使い、新たにクリーチャーを召喚する。召喚とは言うが実際のところは『[靈氣／Aether]』を通じてクリーチャーを再現した一時的な分身をその

場に創造する』魔法を唱えたという方が正しいだろう。

「灰の盲信者／A s h Z e a l o t」

私の目の前に発生した炎の中からメイスを持つた神官戦士の女性が現れる。メイスには炎が灯つており、彼女の焼き尽くすという意思を表しているようだ。

「スケルトンどもをやれ。遠慮はいらん」

ついでに装備品型アーティファクトの【調和者隊の盾／A c c o r d e r, s S h i e l d】を取り出す呪文を唱え、周りのマナを用いて灰の盲信者に装備する。移ろいやすいマナを固定することで効果を永続的なものにする。この盾もマナを用いて再現する魔法を唱えて現れた物なので、装備するにもマナが必要なのだ。

「やれ」

灰の盲信者はスケルトンよりも早くメイスを振るい、反撃される前に次々と屠つていく。スケルトンが攻撃してこようものならばそれよりも先に懷に潜り込み、メイスで叩き潰し、弓で射られる前に火炎を飛ばして焼き尽くす。そして調和者隊の盾は装備する者の耐久値を底上げし、攻撃後に発生する隙を消す。今この場における理想的な戦士の活躍と盾を持った少女の活躍で瞬く間にスケルトンの数が減つていった。

「仕上げといこうか」

残りはまとめて焼き尽くす。マナは潤沢だからかなりの広範囲で焼けるはずだが、念

のため威力も重視しておこう。

「そ、う、ら、大盤振る舞いだ！【とどろく雷鳴／R o l l i n g T h u n d e r】！」
辺りのスケルトンたちに放たれた雷が少年たちと灰の盲信者を除いてすべて焼き尽
くす。

「ふうう……」

かなりの量のマナを操つた所為で疲れが出たか。昔はどうまくはいかないものだな。魔術書を閉じると、唱えた呪文のページが吸い込まれる様に魔術書の中に溶けていく。それに伴つて灰の盲信者と濃霧の層も消えていった。私からも飛行の特性が消えてい

一息吐いて彼らを見れば、こちらへの警戒を解いておらず、いつでも動ける様に構えている。まずはこちらが敵ではないことをアピールするとしようか。

……それにこの少年、なるほど……。



『あれだけの術を使つてまだ魔力が衰えてないだつて!? サーヴァントの反応がないってことは人間なのか!?』

ロマンがデータを観測しながら驚愕の声を上げる。目の前に現れたこの人は一体何なのだろう? 空を飛んだり雷を出したり、霧で所長を守つたり、サーヴァントを召喚したようにも思えたけど、さつき消えてしまつた女の人もサーヴァントではなかつたみたいたし。

「先輩、気を抜かないでください。相手の力は未知数です」

「うん、ごめんねマシユ。戦つたばかりなのに」

オルガマリー所長も助けてもらつたことよりもイレギュラーな事態に大分テンパつていてオレの後ろに小さくなつて威嚇してゐる。フオウも珍しく警戒しているみたいだ。
「うん、良い状況判断だ。君たちからしてみれば私は未知であるが、私からすれば君たちについてはいくつか既知である。そこでだ」

目の前の謎の人物はさつきの本をまたどこからか取り出すと、オレに向かつて投げ渡してきた。

「読むといい。それは君の運命への啓示となるか猛毒となるか。君の心次第だ」
ずしりと重い分厚い本を支える手が震えている。ええい、此処まで来ればなるよう

なるはすだ！ 思い切つて本を開く！

「……!?」

頭の中に何かが流れ込んできた。最初は読めなかつたはずの文字がみるみるうちに読めてくる。何かが体の奥の方、心臓とかそういうのじやない、体の芯？ なにか暖かいモノを感じる。小さな種火みたいな暖かさだ。

『藤丸くん!? どうしたんだい!? いきなり魔力量があり得ないほど膨れ上がり始めたんだけど!?』

「すゞい…………！ 先輩から津波みたいに魔力が流れ込んでくる…………！」

ページを捲る手が止まらない。呪文を1つ見るたびに自分の中に知識が流れ込んでくる。

「予想以上の才覚だ。種火のような灯でこれならばあるいは……ククク、ボーラスのクソトカゲが慌てふためく顔が目に浮かぶようだ」

どんどん体の中で火が大きくなっていく。そして最後のページを見終わつて本を閉じた瞬間、今までの常識であつた世界の他に世界を感じた。

「さあ、お前も私のようにやつてみろ。その本はお前に合わせて新人向けだ」

もう一冊の本が飛んでくるのをキャッチして、開く。最初に見えた呪文をほぼ無意識に唱えていた。

【平地／Plains】

二つ以上の音が同時に口から吐き出される違和感すら今のオレには当たり前のこと
に感じられ、そしてどこか遠くの大地に立つ自分を幻視した。何もかもが平等に均され
た平地から望む朝焼けがオレの目を焼いたとき、オレの中に白い光が寄り添っているの
を感じた。

それは正義の色、それは平等の色、それは裁きの色、それは節制の色、それは慈愛の
色。

「少年、君は目覚めた。君の中に灯が灯つた。そして君の運命は変わった」

オレの中で言葉を反芻する。つい最近までオレはただの学生だった。それが今こん
なことになつていて。それでもだ。

「先輩……」

こんな自分を無条件に慕ってくれるような女の子を、見捨てるような下衆には成りた
くない。

「ははははは！ やはり君から感じた色はそれだつたか！ さあ、たつた1つの白マ
ナだが、君の手にある呪文は唱えられるものがあるはずだ。さあ、唱えてみるといい」
本のページの中の一つに記された呪文を、今度はしっかりと意識して唱える。

【グリフの加護／Gryff, s Boon】

半透明の、白鳥のような頭をした生き物——あとであれはヒポグリフだつたと知つた——がマシユを包み込んだ。その翅はマシユの背に宿り、その輝きはマシユの盾に宿つた。

「先輩！　これは……」

「……おめでとう、そしてこれは誕生祝だ」

いつの間にかオレの後ろに立っていた声に気付くことなく、オレの頭の中にあらゆる【知識】が流れ込んでくる。

「最初のうちはそのくらい新しいモノで十分だろう。なあに、慣れてくるたびに君に新たな【知識】を与えるよう」

頭の中に整然と並んでいく知識の大図書館。

「あとはじっくりと観察させてもらおうじゃないか。新しいプレインズ・ウォーカー君」頭の中で【知識】がはつきり整理されてくると、その多様さに驚く。でもそんな暇はないと言わんばかりに、オレに知識を渡した人は恭しく礼をする。

「では、自己紹介だ。初めまして諸君。私は異なる次元……諸君らに合わせて言えば異世界、異星、異界と呼ぶべき場所からやってきたプレインズ・ウォーカー。名を『ローザ』という」

これが、彼女とオレ達の旅の始まりだった。

冬木市／F u y u k i c i t y

「成程、君たちの事情は理解できた」

私は彼らとの情報交換を進めていた。意外だつたのは新人プレインズウォーカー（以下P.W）の彼、藤丸立香も説明を受けてようやく思い出したかのような反応をしたことだ。

「先輩は演説中に居眠りをなさつてましたから」

「彼は将来大物になるに違いない。

「1つの歴史を改変する現場は私も目撃したことがあるから、特にいう事はないが」

「ちよつと待つてどういうこと？」

「言葉通りの意味だ。あれは膨大な魔力と縁のもたらした一種の奇跡だが」

「あのドラゴフイリアは元気だろうか。

「それに貴女の使う魔術は私たちの物と随分違うものだし……正直呼吸同然に第二魔法同然の行為をしないで頂戴」

「そればっかりは何とも言い難いな。これでも随分と弱体化したんだ」

昔はそれはもう神の如くだつた。無から有を創り、老いを知らず、無限の知識があつ

た。あのクソトカゲは未だにあのころの力を取り戻そうと躍起になつてゐるらしいが。「全盛期中の全盛期は本当に『魔法使い』だったって事? インチキ性能も大概にしなさい!」

「まあ調子に乗りすぎてマナの変質を招いた以上、報いは受けていると思うがね」

正直言つて私の使う術はこの世界では重い。

「たかだか【稻妻】程度に、この世界では龍脈が必要なことが方々私としては驚きだぞ。まあ【山／Mountain】との繋がりがないと発動すらできないのは変わらないと思うが」

「貴方の術は規模が大きすぎるのよ!」

「その気になれば世界を消し飛ばすような代物を発動できるしな」

視界の端では飛べるようになつた少女……マシユ・キリエライトが飛行する感覚を掴むため、炎に照らされた夜の空を舞つてゐる。思いのほか順応が早いな、あの子。その姿に藤丸君は見惚れていよいよだ。まあ今の彼女は控えめに言つて天使だからな。

「さて、お互いのことについての質問はこのようなものだな。そちらの管制室にもあとでお邪魔させてもらうよ。私も新しい次元の魔術にはとても興味があるんだ。それに私程度のP.Wなんぞゴロゴロそこらの次元にいる」

『か、考えたくもない光景だね……』

「それはそれはバケモノぞろいだぞ？ 最悪のエルダードラゴンにテレバスの天才、怪物を狩る大男に千年単位で生きている吸血鬼、拳句の果てには次元を滅ぼし尽くすような怪物を殺した奴等だつている」

「正直二度とガラクには会いたくない。あの時は真面目に死ぬかと思った。

「ウルザは割とこちらの魔術師たちと似たようなことをやつていた気がするな」

「そ、 そうなのね（ホルマリン漬けとかかしら？）」

「兄弟喧嘩に巻き込まれたとはいえ師匠殺したり、別れた後に人外になつた弟葬るために魔法使つて次元一つを氷河期にしたり、そのまま弟が発狂した原因の次元を滅ぼすための兵器の部品としての一族を創つたり、あ、あと無二の友の心臓を素体にして時間遡行の探査機を完成させてたりもした。最後の最後で復讐相手の大将に洗脳されて寝返つたり」

「（魔術師より禄でもなかつた！？）」

「いや、まあ悪い奴ではなかつたはずなんだが。基本的にP Wで正気な奴ほど珍しい位には全員精神疾患者と言つても過言ではない。

「さて、ここで長々と話すのもなんだ。まごまごしていたらさつきのスケルトンが押し寄せてくるとも限らない」

「移動用に何か良いモノはなかつただろうか。できれば襲われない様に頑丈な奴に乗

りたい。たしかカラデシユにそんな感じのアーティファクトがあつたはずだ。

「お、これなんていいな【アラダラ急行／A r a d a r a E x p r e s s】」

やたら精巧な装飾が施された列車が虚空から現れる。んーいつみてもデカイ。

「これに乗つてくれ。ちよつとやそつとじや壊れないし、さつきのスケルトン程度なら何体相手でも……て訳ではないが問題はない」

一斉に襲い掛かられたら流石に壊れそうだな。

「運転は……こいつらに任せよう。【変速の名手／G e a r s h i f t A c e】【経験

豊富な操縦者／V e t e r a n M o t o r i s t】【模範操縦士、デパラ／D e p a l

a, P i l o t E x e m p l a r】

私の召喚によつてドワーフの男女たちが現れ、列車に乗り込んでいく。

「そら、乗つた乗つた。マシユ嬢！ お空の旅はその辺にしてくれ！ 出発しよう」

私たちを乗せた列車はとんでもない加速と共に走り出した。

☆☆☆☆☆

列車の中でオレはローザさんからPWについて講義を受けていた。確かにPWの魔

力は凄まじい。しかし、生命力や性能が上がるわけではない。食事も睡眠も必要だし、死ぬことだつてある。

魔法^{マジック}、それは力。創造と破壊、操作と変形。それを成す力。世界を統べる理さえも壊しうる力。いかに研鑽を積んだ魔術師であつても、自らが住む次元の常識に囚われる。

PWはその縛りから解き放たれた存在。オレの中にもあつた灯は今はまだ種火のよううに嬾く弱いモノらしい。だが、更に灯が燃え盛ることになれば、オレは稀代のPWとなる資質がある……らしい。

一緒に講義を受けているマシユと所長、それと通信越しに口マン。

曰く、オレを含め魔術師たちはマナが何たるかを理解できていないらしい。

マナというのはどの次元においても存在し、魔術に必須なモノ。それは純粹無垢で靈氣と共に久遠の闇を満たし、土地によつて色づく。それは五色の色に分かれている。白、青、黒、赤、緑。それぞれが性格を持ち、それは人間の持つ心や意思にも宿つている。

白は『平地』からマナを生み出す。正義と秩序、平和などを司る色。

白は法に従い、生命を大切にする。そのため、善や正義の色と思われやすいが、それは一面にすぎない。秩序やそこから生まれる社会を尊ぶ白は、その社会に属さない者を容赦なく断罪したり、その社会に属する個人であつても必要とあれば全体のために容

易く切り捨てる非情な面もある。また融通の効かない法は時に社会を硬直させ自由を奪い、自らを法とする独裁者やファシズムの思想さえ生みだす。無論、命を慈しみ調和を旨とする理想郷を作りだすこともある。

良くも悪くも秩序と正義の体現である。それが白。

青は『島』からマナを生み出す。精神や知識、水や海などを司る色。

青の根幹に根ざすのは知識に対する欲求と、そこから生み出される計略・技術。青は他の色と比較して感情を露にせず、表面上は冷静に行動し柔和に見える。が、その裏では数多の策謀を積み重ね、相手を欺く策略を常に練っている。他者と協力する際も融和ではなく、あくまで利用する為であり、それはギブアンドテイクのドライな関係を築く。また、他人の失敗や、効率的でないやり方を嘲笑し、侮蔑する。常に安全に事が運ぶよう慎重に行動する一方で、好奇心の為に危険な実験や冒険を行うといった面もある。自由を嫌い激しい感情を嫌悪し、常に物事が計算し尽くされた“完璧なもの”であることを望んでいる。予想外の事態や失敗も知識の糧とする一方で、それに対応できなかつたり他者に擦り付けるといった狭量さも時折見せてしまうことがある。中には実験や知識の探求の果てに狂気に陥り、世界の根底を捻じ曲げてしまうようなものも居る。そして青は流れゆく水との親和性があり、それは時間にすら影響を与える。

黒は『沼』からマナを生み出す。腐敗や死、悲しみや恐怖を司る色。

素晴らしい自己中心的で迷惑極まりない。だが……そこにあるのは、強烈な精神力だ。圧倒的な自己主張だ。孤独をものともしない自立心だ。秩序や道徳を破壊したくて無視するのではない。自分が持つ自分の秩序だけが、唯一従うべきルールだと、雄弁に語る。

常に自分の周囲を観察し続け、自分に利益・不利益をもたらす可能性があるものを見極め、自分に利益をもたらす可能性があるものは、他人が持つてているならば力づくでも奪い取り、自分に不利益をもたらす可能性があるものは全力でそれを排除する。全てのものが持つ価値・可能性を信じているから。

自分の欲求を叶えるためにならばありとあらゆる代償を払う。例えそれがかけがえのない無二の親友や、血を分けた肉親であつても。そうすれば願いが叶うのならば躊躇などはしない。

どこまでもストイックに探究を続ける魔術師は恐らくこの色が最も近いのかもしない。

赤は『山』からマナを生み出す。炎や怒り、混沌や自由を司る色。

とんでもない快楽主義者。もしいたなら黒並みに迷惑だろうし、表面上は赤も黒も同じに見えるが、そこには決定的な違いがある。黒は、自分さえ好きにやれば、他人がどうなろうがいいと思っている。だが赤は、生きとし生きるもの全てが「自由」であることを望む。赤は、秩序や規則を「破壊したくて破壊」する。例え自分に利益がなくても、目障りな枷は破壊する。

それに、赤は黒と違つて孤独じやない。

赤の言う感情には、愛や友情が含まれている。つまり、恋人や家族や友達を、大切にすることだ。感情がそうさせるなら、赤は仲間を守るために命を賭ける。黒は絶対、そんなことはしない。

恐らく最も人間らしい色だと、ローザは言つていた。ただ、致命的に知性が足りない脳筋とも揶揄される色だから染まりすぎるなども警告してた。

緑は『森』からマナを生み出す。自然や純粹さ、成長を司る色。

緑とは自然そのもの、そしてそれと共に生きる全ての生物である。緑は赤と違い、建設的に物事を見据え、順序立てて基礎から作り上げていく。他者との共存を重視し群れを作り、仲間を守り、時には全体主義的な構造を作り出す。一方で赤と同じく、時には

細かいことを考えず致命的な激情で行動し、それはまるで自然災害のように他者に襲い掛かる、といった相反する性質を持つ。

緑は生命を慈しむが、平和を愛している訳では無い。弱肉強食は美しい自然のサイクルであり、弱きものが強きものの糧となることを哀れんだりはしない。捕食され、別の生命の血肉となる。そこに善悪などは存在しない。

また、自然から離れる『文明』を何よりも嫌う色である。

生きる上で必ず関わる色であり、ローザが初めて触れた色だつたらしい。

そのほかにも特殊なマナの事もあつたが、オレ達にはまだ早いらしい。一気にこれら

の事を詰め込んでパンクするだけだから、取り敢えず大事なのは

1. マナには色があり、それぞれの色が特徴を持っている。
2. PWたちが扱う呪文や魔術と色は切つても切れない関係にある。
3. それぞれの土地との繋がりが無ければマナを引き出すことはできない（例外有

り）

以上の3つだけは忘れないでほしいとのことだった。

因みにローザ曰く、オレは白の色が濃く出ており、それに追従するように赤と青が、そ

れに遅れて緑、最後にほんの少しだけど鮮やかな黒が見えるらしい。

マシユはまだ色が薄いけど、白がはつきり見えるらしい。

所長は赤と黒と青が均等に溶け合つてゐるらしい。

フォウは緑と白、ロマンは黒と白の狭間で揺れているとか。

「さて、講義はこんなものだろう。それにどうやらお客様のようだ」

『え？ あっ！ すっかり夢中になつて気が付かなかつた！ みんな！ サーヴアン

トの反応だ！』

列車が急停止した。倒れこんできた所長を支え——意外と柔らかかつた——窓の外を見る。教会のような建物だったところから伸びた鎖が列車を止めたみたいだ。

「ほう、これがマシユ以外のサーヴァントとやらか。んくなるほど、システムは似てるがブールが少ないな。1つの次元に搾ればそりやクリーチャーも少なくはなるか」

ローザはオレたちに降りるように促す。降りた後戻えない所長をさつきの霧で包んだ。

「ちようどいいな、では実技の授業といこう。これがP.W.の戦い方だ。藤丸君は特によく見ておけよ？ 後々君の構築する戦略が勝利の力ギとなるのだからな」

ローザがまた違う本を取り出して構えた。

「さて、サーヴァントの基礎戦闘力はおおよそ戦闘機並。音速が普通となれば人間で

知覚はできない。だが、私と対峙するという事、PWと対峙するという事がどういう事か。とくと見せつけてやろう」

決闘／D u e l

「さて、サーヴァントとやらの性能を見せてもらおう」

解析用のアーティファクトを装着する。相手のクリーチャーの能力や唱えたスペルがどんな効果であるかを確認するための物だ。

対象のデータはこんな感じだ。

【Shadow servant, Rider】

③

4 / 4

警戒

このクリーチャーは搭乗時にタップしない。

「今回使う魔術書はこれで行くか」

デツキ

普段私が使う魔術書は初心者向けではない。土地との繋がりのみの魔術書の戦い方なんて初心者向けの戦略ではない。というか初心者に土地単とかギルド門とか無理だろ。なのでオーソドックスにやろう。

魔術書を書庫から取り出し、開く。辺りにページが舞い、再び集まると七つの呪文が私の周りを取り囲む。

「キープ」

これで私の手札は確定した。あとは動き方を見せるだけ。藤丸君に渡したデツキとこれはほとんど同じだからな。

「平地／Plains】セット、「スレイベンの検査官／Thraben Inspector】を召喚」

私の背後に砂漠が浮かんだあと、中世の兵士のような装備をした年配の女性兵士を召喚すると同時に、一枚の血塗れの羽が傍に落ちてきた。これはスレイベンの検査官の持つ能力だ。私が連續して呪文を唱え終えた隙に、相手も動き出す。が、まだ私には届かない。

「ブロック宣言。スレイベンの検査官」

女性兵士が背中の剣を抜き、サーヴァントを迎撃つ。あつさりと剣は折れて女性兵士はサーヴァントの持つ短剣に貫かれて消滅した。

「ローザさん！」

「慌てるな。これくらい日常風景さ」

魔術書から新しい呪文が飛び出す。

【感動的な眺望所／Inspiring Vantage】セット、【模範的な造り手／Toolcraft Exemplar】【スレイベンの検査官／Thraben Inspector】召喚

今度は中央アジア風の建物が背後に浮かぶ。そして先程の女性兵士と金槌を持つたドワーフの男が現れた。女性兵士の傍に、今度は奇妙な形の石柱が生える。

「残手札3」

動きを止めた隙に襲い掛かりくるサーヴアントを、先程の焼き直しのように女性兵士が防ぎ、消えた。

【感動的な眺望所／Inspiring Vantage】セット、【密輸人の回転翼機／Smuggler's Copter】セット

今度は特徴的な形のヘリコプターが現れる。ただの置物のようにそこにあるだけだが、こいつの真価は別にある。

「さあ、かかるつてこい」

私が動かないと見るや、飛びかかるつてくるサーヴアント。

「搭乗しろ！ 模範的な造り手！」

私の命を受けて回転翼機にドワーフが乗り込む。唸りを上げて機体が飛び上がる。

「ブロック宣言、密輸人の回転翼機！」

回転翼機が向かっていくと同時に、私の魔術書から呪文が飛び出す。

「いい仕事だ！ こいつが欲しかった！」

そうしてその代償として、私の周りにあつた呪文が一つ燃えて消える。それにちよつと遅れて回転翼機が爆発する。ドワーフは脱出装置で回転翼機から脱出していた。

回転翼機が迎撃のために撃ちだした弾丸はサーヴァントに相当のダメージを与えていたらしく、夥しいほどの傷をつけていたが、すぐさまそれは修復された。

「あれだけの傷が一瞬で!?」

「そう驚く事でもない。よくある話だ」

クリーチャー同士の傷のつけあいは一瞬の交差の中で行われ、殺しきれずに相手に主導権^{ターン}を許せばその傷は即座に塞がる。そうでなくとも状況は主導権の取り合いの中で何度もリセットされている。さあ、もう一度私が主導権を握った。

「平地／Plains セット」

さて、手札は二枚だ。動かない私に、与えられたプログラム通り動く人形のように襲い掛かるサーヴァント。

「ローザさん!!」

慌てるな、この程度の命の削り合いはこなれた物さ。短剣が私の胸目掛けて振るわれるその瞬間を待つていたんだ。こつちはな。

「停滞の罠／Stasis Snare」！」

瞬間、正八面体の構造物がいくつも現れ、サーヴァントを取り囲んだ。丁度真ん中あたりの溝が青白く光ると、サーヴァントは身動きが取れなくなつた。

「無駄だ。次元ごと区切つてるんだ。その面晶体を破壊するには骨が折れるぞ？ 最も内部からそいつに攻撃が届くことはないがな」

まあ取り敢えずあの手札からの最適行動は全部取つた。問題はただ閉じ込めただけで勝利条件を達成できていないことだ。ここで魔術書を閉じれば、このサーヴァントは動きだす。

「さて、これで勝ちと言うわけにはいかんだろう。今からちょっと準備を整える」

周りの彼らは幾分か放心しているが、すぐに気を取り戻した。

「それじゃあ、新米君の為に、少し工程をゆっくりやろう」

魔術書から呪文が出てくる、前に必要な工程がある。

「まずは行動していた自身のクリーチャー、そしてマナを取り出した土地を【再起動】。
そして【状況維持】^{アップキープ}。それから【補充ドロー】だ。この順番を間違えると術理が一瞬で崩

壊する。それに再起動を怠ればそれだけ動きが鈍くなると思え」

理解したようなので次へ。

「土地との繋がりは主導権を握っている間に一度だけ確立できる。さつきも言つたが、この土地から生み出されるマナが無ければ呪文は使えない」

今度は山をセットする。私の背後に活火山が浮かぶ。

「そして必要なマナを土地から生み出す。さて、私がもつ手札、この周りに浮かんでいる魔術書のページだな。一応維持上限は七だ。主導権を渡す前までに調整しておくことだ」

「もし、七以上持つていたら？」

「頭が爆発して死ぬ、訳ではないが実際神経系が焼き切れない様に魔術書が勝手に処理する」

相手が動けないのをいいことに着々と準備を進めていく。

「今回の勝利条件はあのサーヴァントの撃破。故に攻撃を誘発し、ブロツクしたときでなければ殺しきれん。まあ向こうは防ぐ気はないからこちらから攻撃をして意味がないからという前置きがあるがな。対人ではこうはいかんぞ」

布陣は整つた。土地が全部で十枚出るまで回した甲斐があるな！ 既に私のコントロール下で高速警備車とデバラを用意して、私が主導権を握っている。

「では、待たせたなサーヴアント。【集団的努力／Collective Effort】」

今回は機嫌が悪かったのか、こいつは底の方に眠っていた。術が発動し、面晶体が破壊される。

「ほれ、かかつてこい」

襲い掛かつてくるサーヴアントの横つ腹から、高速警備車が突つ込む！ 碎け飛ぶ高速警備車と真つ二つになるサーヴアント。そして華麗な着地を決めるデバラ。

「はい、終わり」

魔導書を閉じると呪文が全部帰つてくる。

「ああ、時間かかつちやつたから一応言い訳しておくと、もつと早く倒す手段はあつた」

そういつて別の魔術書を開く。丁度いい具合にもう二体ぐらい来たし。

「アサシン、とランサーね。アサシンの方はアンブロッカブルで、ランサーの方は二段攻撃持ちと」

そこら辺にあるマナを使つて速攻で片づけることにしようと思う。だるい。

「ほい、アサシンの方は【四肢切断／Dismember】、ランサーの方は【叱責／Rebuke】」

アサシンを取り囮むように虚空から現れた腕がアサシンの四肢をもぎ取り、最後に頭

を潰す。ランサーも動体に奇妙な紋章が刻まれたあとに爆発した。

「はい、まあこんな具合でね。簡単にぶつ殺す力があるわけなんですけれども、大事なのはマナがあること前提だからね。自分の魔力やカルデアの電力じや全然足りない術とかあるからね。気を付ける様に」

もう一体気配がするけど敵意はない。接触してもよさそうかな？

「ほら、ロマン君。いつまでも呆けてる暇はないぞ。私が帰つたらいくらでも教えてえあげるから」

『えっ！ 本当に？ ジャンケン！ サーヴァントの反応だ！ けど、さつきとは違うみたいだね』

フードを被つた青年が現れた！ 杖を持つているから魔術師、とは言い難い。
ジエスカイン^{面白カイン}_{集団}道の僧侶達は杖術にも精通していた。

「おつと、敵じやあないぜ。あんたらと事を構える気はない。一瞬で爆破させられるのはごめんだからな」

フードを脱ぐと、精悍な顔立ちの御仁。うむ、なかなかにいい男で。

「俺はキヤスターだ。とりあえずあんたらと話がしたい、この歪な聖杯戦争を終わらせるために」

修業／D i S C i p l i n g

まさかルーンの起源がこの次元の神話に遡るとは思つてもみなかつた。目の前にいる精悍な青年はルーン魔術に精通したケルトの戦士とのこと。ロマン氏からケルトについての説明を受けて、ぜひとも魔術書へ蒐集したいところである。聞けばこの聖杯戦争は過去に偉業を成した英靈や偉人たちを召喚するとのこと。俄然楽しみが増えた。「いやあ、魔術書の記述が増える増える！ ありがとうキヤスター殿！ 礼と言つてはなんだが、私にできる事ならば何でも言つてくれたまえ！」

「ん？ 今なんでもつて言つたか？」

にやにやしながら私の体を值踏みするように見るキヤスター。分かりやすいな。正直な男は嫌いではないぞ。

「そこらへんで一発つて訳にはいかんぞ。物騒なところだからな」「それじやあ、安全な場所ならいいんだな？」

「私としては好みの男だから拒む理由はないぞ。生娘じやないがよろしいか？」

「別に構いはしねえぜ。余計な気遣いしなくていいしな」

猥談で盛り上がる私たちを余所に、顔を真っ赤にしてるカルデアのメンバー達。

「なんだなんだこのぐらいで、マシユはともかく所長。生娘みたいな反応して」

「しょしょしょしょ処女じやないわよ！」

「まあ、坊主は童貞っぽいしな」

「いや、その、まあ」

一瞬の隙をついて藤丸君の股間を握る。うーんなかなかはずつしりくる。

「ちよちよちよ！　ローザさん!?」

「ほほう、なかなかご立派なものを……」

「ローザさん！　何してるんですか！」

「いや、藤丸君の『男』をちょっと確認しただけだろう？　次はマシユちゃんのマシユマ

口を……」

「やめなさい!!!」

所長から魔力弾が飛んでくる。が、興奮して顔が真っ赤な上に目がグルグルして狙いが付けられてない。

「危ないなあ、もつと余裕を持ちたまえ。生娘じや……生娘だつたな」

「うるさいいうるさいいうるさい!!!」

因みに後でキヤスターのも握った。オウフツ！　つて声を上げた。こちらもいいモノをお持ちのようだ……。

☆☆☆☆☆

十分に青少年を弄りまわして満足したところで、現在の状況を確認する。サーヴァン
ト一名、デミ・サーヴァント一名（宝具なし）、PW一名、新米PW一名、魔術師一名。
「そこのサーヴァントのお嬢ちゃんが宝具を使えないっていうのは結構な問題だぜ？

宝具つてのはサーヴァントにとっちゃ切り札だ。宝具なしじゃあこの先の戦いで、生き
残ることは難しいぞ」

「そこはキヤスターの言う通りだな。アドリブは準備ができるいないもののやること
だ」

といつても私は宝具やサーヴァントに関しては専門外だ。私ができることと言えば、
せいぜい後方からの援護や雑魚処理ぐらいなものか。あとは新米PWへの指南だな。
「つーわけでだ、お嬢ちゃんの宝具を使えるように特訓だ！　なーに、死ぬ気でやればで
きるつて！　俺がそうだつたからな！」

笑つてない目で笑うキヤスターからは謎の説得力が湧き出ていた。確かに根性論は
否定しがたい部分がある。赤を使う奴等の大半は根性論者ばかりだつた。あと時たま

白とか緑。青に根性論を説けば情け容赦のない論破の弾丸が飛んでくる。黒はそもそもその手の話を振つても無駄だ。必要だと判断すれば躊躇なく使うとは思うが。

「そんじや、まずはとこどんまで追い詰められてみるか」

一瞬で所長の背後に回つたキヤスターがコートにルーンを施す。あれ確か厄寄せのルーンのはじじや……。

「きやああああ！　スケルトンの群れがあああ！」

「そら、必死こいて守らねえとマスターもろとも御陀仏だぜ！」

「藤丸君は呪文を使ってマシユちゃんをサポートしながら所長を守つてみようか」

「りよ、了解！」

襲い掛かつてくるスケルトンの数は膨大。それを守りながら倒すにはマシユちゃんと藤丸君の連携は必要不可欠だ。

「藤丸君にひとつ言い忘れてたことがあつたが」

「鑽火(きりび)の輝き／Immolating Glare」！ なんですか？ ローザさん

「魔術書一冊につき同じ名前の呪文は四つまでだから慎重に使え

「今1個使いきつたところで言わないで下さいよ！」

そういうながらも新しい呪文をひつきりなしに飛ばし、時折マシユちゃんに強化を施しながら戦況を優位に運んでいる。うーん、中々のアドリブ力とタスクを持っている

な。これは良物件だ。マシユちゃんがいなければ狙つてたかもしれないな。

「さて、そろそろルーンの効果も切れる。次は俺が直接相手をしてやるか」肩を回しながらキヤスターが疲労困憊の三人組の元へ近づく。そしてマシユちゃんは無事に宝具を発動させることができた。キヤスターの宝具もそれは素晴らしい物だつた。素晴らしいので速攻で記述を増やした。

木々の巨人、ウイツカーマン ③GG

4 / 1

クリーチャー－エレメンタル

対戦相手を1人対象とする。木々の巨人、ウイツカーマンを生け贅に捧げる。対戦相手に5点のダメージを与える。

焼き尽くす炎の檻 ④R

ソーサリー

クリーチャー1体を対象とする。そのクリーチャーのコントローラーはそのクリーチャーを生け贋に捧げて、点数で見たタフネス分のダメージを受ける。

疑似展開／人理の礎

①WW

エンチャント

あなたがコントロールするクリーチャーは+0/+2の修正を受ける。

「ふつふつふん♪ 今日はいい日だな♪ お姉さんは機嫌がよいぞ♪」

「あ、あの、だからって私を抱きかかえながら撫でないでください……」

今日はいい日だな。ほらフオウくん、ゼンディカで採れる果物だ。美味しいぞ。

フェリダーハ好んで食べるんだ。もちろん人間でも食べられる。

「フオウ！ フオウ！ モキュキュ、フオフオーウ！」

匂いを嗅いだりして警戒してたみたいだが、一口齧った瞬間に踊り出すフオウくん。そのまま一個きれいに平らげてしまった。ちなみに人間が食べるとイチゴの味がするリンゴみたいな感じだ。

「それじゃあ、いよいよ本丸を攻めに行こうかね」

キヤスターがストレッチを行いながら、何でもないよう言いつぶつ。

「ところで、この聖杯戦争の聖杯はどこにあるの？」

「ああ、それはあそこだ」

キヤスターが指さした場所は、山の斜面だ。あそこに洞窟があり、その奥に聖杯があるとのことだ。しかし、聖杯はすでにセイバーの手中であり、セイバーに打倒されたサーヴァントたちはセイバーの傀儡と化しているのだという。すでにライダーとアサシン、ランサーは撃破、残る敵はアーチャーにバーサーカーだけだ。

「アーチャーの野郎は弓兵のくせに剣を使いやがるからな。接近したとして油断するんじゃねえぞ」

どうにもそのアーチャーとは因縁があるらしいキヤスターは、杖を握る手に力が籠つていた。

「最悪バーサーカーは私が何とかする。藤丸君たちは聖杯を奪取してくるんだ」

「おいおい、いくらセイバーの傀儡になつて弱体化しているといつてもバーサーカーは

強敵だ。対策も取らねえで戦えるほど甘くはないぜ」

キヤスターが真面目な顔で忠告してきたが、私は別にそのバーサーカーを殺すつもりはない。

「なに、無力化してくればいいんだ。幸い私向けの盤面が見えてきたんだ」

私たちの決闘における魔術師ブレイヤーに相当するのはおそらくそのセイバーのはずだ。そのほかのサーヴァントたちはクリーチャーのようなもの。なら私がとる対策はごまんと用意できる。が、プランはいくつか練つておく必要があるな。

「藤丸君、君にこいつを託しておく」

機械仕掛けの梟を藤丸君の肩にとめる。

「これは?」

【悪意の大梟／Baleful Strix】。なかなか古いものだが、君の助けになるはずだ』

魔術書から飛び出した呪文をひらひらせながら、彼らと別れて探索を開始する。無色の魔術書に新しく呪文が記述されているのを見て、私はほくそ笑む。どうやらゲートウォッチの方々もかなり活躍しているようだ。藤丸君に渡しておくべきだつたな。【宮殿の使い魔／Palace Familiar】に運ばせよう。

「さて、君ら雑魚の相手をしているほど暇じやがないんだ。早々に消えてもらうとしよ

うか！」

チャンドラーが得意としている炎の魔術を少々押借。辺りにいるスケルトンたちを焼き払う。ほかにも召喚を行いながら、辺りの雑魚を掃討していると、遠くのほうで爆発音がした。大方、アーチャーあたりと戦闘になつたのだろう。

「んー。通信機を借りればよかつたな。向こうの情勢がわからん」

そんなことを考えていると、足元に何かが落ちている。星のような宝石だ。かなりのマナが籠っている。一応回収しておくか。

「ふう、しかし変な骨とドラゴンの牙がよく落ちているな。まあこれも念のため集めておこう」

せつせと集めて【作業場の助手／Workshop Assistant】に運ばせる。かわいい。

「しつかし数が多い……まとめて焼くか！」

作業場の助手たちを一旦戻す。その後に赤のほかにマナを二色だす。準備完了。

【光輝の炎／Radiant Flame】！

辺りにいるスケルトンたちをすべて巻き込んで、輝く炎が焼き尽くしていく。この炎は戦場に立つクリーチャーを一切の区別なく焼いてしまうため、藤丸君たちがいるところでは使えない。同じ理由で【次元の激高／Planar Outburst】なんか

も撃てない。というか下手すれば次元そのものが崩壊しかねないからな。

「これだけ派手に暴れれば、向こうも食いついてくるかと思つたんだが……」

踵を返し、藤丸君たちの元へ向かおうとしたその時、強大なマナを感じその場を跳ぶ。凄まじい破碎音と共に土煙が上がる。煙へ向かつて覚えたてのガンドを撃ちこむ。しかし、それすらも意に介さないらしく黒い影が私へ飛びかかってくる。振りかぶられた斧剣を紙一重で避ける。風圧だけで私が服が少し裂かれてしまった。

「こいつは……強いぞ」

アーティファクトが解析したデータを見て、私の背筋に冷たい汗が伝う。

シャドウサーヴァント・バーサーカー ⑤ BBB

8 / 5

トランプル

二段攻撃

このクリーチャーが死亡したとき、あなたはXを支払つてよい。そうした場合このクリーチャーを戦場に戻す。Xは死亡した回数に等しい。

なんだこの脳筋の塊みたいな性能は!? まあ除去耐性が死亡限定なのはありがたい。それを差し引いても強いな。こいつは。幸いこいつを守るような支援も飛んでこないのだ。やりようはある。

「頑張つてくれたまえよ、藤丸君。すぐに追いつくからな」

聖杯／Chalice

ローザさんと別れた俺達は、キヤスターの言う通りに聖杯を目指していた。途中に群がるスケルトンたちはマシユやキヤスター、ほんのちょっとだけ俺と所長で蹴散らしていった。所長が戦つている姿を見てマシユやロマンがすごく、すごーく驚いていた顔をしていたのが印象的だ。所長は怒っていたけど。

「もう少しで入り口だ。そろそろ番犬が出てくるぜ」

キヤスターがそういつた直後、風切り音が俺目掛けて跳んでくる。

「マスター！」

マシユが射線に割り込んで矢を防いでくれた。よくよく見れば其れは矢ではなく、一本の剣だった。

「遠距離からという事は……、アーチャー！」

所長の声に合わせる様に、黒い靄のかかつたサーヴァントが現れる。

「シャドウサーヴァント……」

戦闘態勢に入った俺達。そこへ一羽の梟が本を咥えて俺の元へ飛んできた。梟は本を俺へと落とすと、そのままアーチャーに向かって呐喊し始めた！

「あれってまさか、ローザさんのクリーチャー!?」

梟はアーチャーに爪でひつかき傷を与えたけど、いつの間にか両手に握られていた剣で斬り裂かれてしまった。梟が与えた傷もすぐに塞がってしまう。

「フン、とうとう使い魔を使役するようになつたのか」

「生憎、俺のじやねえ。ちつとばかしい女が協力してくれているのさ」

アーチャーがキヤスターの背で小さくなっている所長を睨んだ。けど、すぐに視線を外してしまう。

「マスター適性がないとはい、一端の魔術師。だが、その少女が使役していたわけではあるまい」

黒い剣の切つ先を俺に向けて殺氣を飛ばしてきた。それを敏感に感じ取つたマシユがすぐさま前に出て盾を構える。

「あるいは、そこの常識外の魔力を持つた少年が呼び出したものか」

そう言い切るや否や、マシユの盾から重い衝突音が響いた。

「くうっ！」

「ほう、手折られる花かと思えば中々に頑張るではないか」

アーチャーが盾を蹴り、宙を舞うとそこへ火の玉が飛ぶ。

「キヤスター！」

「気いつけなあ！　あいつは接近戦が本業だ！　槍を持った俺の一割には届くくらいにな！」

「見栄を張るのはよくないぞ」

「（強い……！）キヤスターへと剣を投擲し、残った剣でマシユの攻撃を捌いていく。

指示を出そうにも、目まぐるしく変わる戦況に目が回りそうになる。どうするか悩んでいると、肩に止まっている鉄の鼻がつづいてきた。鼻はコツコツと魔術書をつづいている。そのまま魔術書に触れた途端、俺の視界ががらりと変わった。

息の詰まる攻防は俺が知覚可能なほどに単純になり、目が回る高速戦闘も俯瞰して見ることが出来た。そして、いつの間にか周りにマナが浮かんでいることも、俺の周りに浮かぶ魔術も、はつきりと知覚した。

「マシユ！」

土地と繋がり、平地から白いマナを出す。俺の掛け声に反応したマシユが盾を振りかぶつた。

「やあああっ！」

「〔絶妙なタイミング／Impeccable Timing〕！」

マシユの攻撃をいなそうと剣を構えたアーチャー。その意識のほんの僅かな隙間

だつた。その隙間を食いちぎらんばかりにライオンが背後から……ライオン？　いや、あれライオン頭の人間！？

「何っ！」

「わあああ！！」

ライオン頭が手に持った薙刀？　みたいな武器でアーチャーを斬り裂き、消えていつた。その攻撃が生んだ隙はとんでもなく大きい。硬直したアーチャーにマシユの渾身の一撃が突き刺さつた。

「追撃！」

「まかせなあ！」

キヤスターの火球が雨霰と降り注ぐ。キヤスターには今ありつたけとまではいかないけど、マナ数にしておおよそ20に上る魔力、言い換えれば龍脈20本分の魔力を注ぎ込んでいる。ガトリング砲もかくやと言った勢いで火球がアーチャーに殺到する。

「心臓を穿てねえのが心残りだが、焼き尽くしてやらあ！」

更に魔力を俺から吸い上げていく。が、俺の魔力は周りのマナを吸収することですぐ

さま補填されていく。

「焼き尽くす炎の檻ツ！！」

木で編まれた巨人は、マシユに放つたそれよりも太く強靭で、空を焼くほどに燃え

盛っていた。

「ぐああつ！」

燃え盛る巨人に捕まれたアーチャーが巨人の腹部にある檻へと収納される。炎がさらに勢いを増していく。

「ぐ、おおおおおおお！」

中でアーチャーが剣を何本も取出しながら脱出を図っている。が、最早脱出は不可能。煌々と燃える炎の中でアーチャーの呻き声が聞こえる。

「さ、流石にやりすぎかな……」

巨人が燃え尽き、炎が消えると全身を火傷しながらもなんとか形が残つてアーチャーが横たわっている。

「ああ？ 灰も残んねえぐれえに燃やしたつもりだつたんだがなあ？」

キヤスターは獰猛な笑みを浮かべながら、更に数発火球を撃ち込んだ。オーバーキルだとと思うんだけど。

「がはつ！ はつ！ はつ、ぐうう」

「よう番犬、丸焦げになつた氣分はどうだ」

「最、悪だ……、まつた、く。火加減が、なつちや、いな……い」

そう言い残して、アーチャーは消えていった。

「へつ、そうかよ」

キヤスターはどこか不満気な顔で歩き出した。

「いくぜ、聖杯はこの先だ」



薄暗い洞窟の中を進んでいくにつれて、ヒシヒシと強い魔力を感じ始めた。

「この先に待っているセイバーだつたな」

先導するキヤスターがおもむろに口を開く。

「あいつの正体はかの偉大なブリテンの王、円卓の騎士を束ねた騎士王」

「それって……」

「ああ、騎士王、アーサー・ペンドラゴン。その人だ」

流石の俺でも知っている。エクスカリバーを振るうアーサー王伝説の名前くらいだけ。

「そら、みえてきたぜ」

目の前には巨大な杯が見えた。

「わかるな、マスター」

キヤスターはさつきのアーチャーとの戦いの中で、俺のことを認めてくれたみたいでマスターと呼んでくれている。真名はクー・フーリンだ。

キヤスターの言う通りに大聖杯には、凄まじいマナが集まっていた。しかし、どう言う訳かそれらは全て黒のマナ。何か汚染されたマナのように感じた。

「あの聖杯、黒のマナに染まっている。いや、あの大聖杯に蓄えられたマナが、大聖杯の中の何かで汚染されているのか？」

「なかなか探しのいいマスターじゃないか」

声の方を見ると、黒い鎧に身を包んだ騎士が立っていた。その身に纏うマナも、黒く変色『されられた』もののように感じた。

キヤスターとセイバーが問答している最中も、それだけが気がかりだつた。

「なあ、セイバー」

キヤスターとの問答にひと段落ついた段階で、俺が割り込んだ。セイバーの目は品定

めをする鑑定士のように鋭く、鉄のように冷え切つていた。

「貴方の目的は、貴方は聖杯に何を願おうとしていた？」

ピクリ、とセイバーの眉が動いた。

「貴方のその『安定を求める』清い青は、今や黒く塗りつぶされても、その中で『秩序を尊ぶ』白い色は失われていない。ならば」

一度、深く息を吸う。周りの沈黙が痛いけど、もうここまで来たら止まらない。言いたいことははつきり言つてしまおう。

「貴方はもう騎士王ではなく、ただの王だ。それも、力で押さえつける暴君そのもの。そこまで堕ちてまで、貴方はあの汚れた聖杯に何を望む?」

セイバーはしばらく表情を変えなかつたが、やがて堰を切つたように笑い出した。

「なぜお前にそんなことを答えねばならん。言つたところで何か変わるのか? 私の願いに賛同でもして頭を垂れるつもりか? ちがうよなあ?」

セイバーが剣を抜き、下段に構えた。その剣には漆黒の魔力が纏わりつき、撃ちだされるのを今か今かと待つてゐる。

「セイバー! 僕は……!」

「問答無用! お前は私の前に立つた! ならば敵だ!」

「マスター!」

マシューが俺の前で盾を構えた。

「ほう、その盾で受けるつもりか。面白い!」

セイバーの持つ聖剣が振り上げられた。

「仮想宝具」
「約束された勝利の剣！」

ア
ス

聖剣が放つた漆黒の闇と、光り輝く巨大なラウンドシールドがぶつかり合った。その衝撃でフオウが吹っ飛びかかったのを、何とかキヤツチして抱きしめる。

うん! いいやうー。」

「ファンタジー!?

なんだか『ちがう！ そつちじやない！ 逃げろバカ！』と言わんばかりにフォウがてしてし叩いてくる。構わず俺はマシユの隣に立つ。

「先輩！」

「女の子を一人で戦わせたら、男が廃るつもんだ！」

右手に刻まれた令呪が輝き始める。その赤い光は、俺の心の昂ぶりに応じる様に増していく。

「一緒に戦うぞ！ マシユ！ 俺達にはその力がある！」

ひとりでに宙を舞う魔術書から、次々呪文が出てくる。それらは全て俺達の、マシユやキヤスターの力を底上げするエンチャント呪文やインスタント呪文。このタイミングで唱えられる呪文で、魔導書にあるありつたけのパンプアップを唱える。周囲にある

マナを根こそぎ、大聖杯の下を流れる龍脈からも絞り上げる様に使い切る。

「うおおおおおおおおおおおおお!!

く。俺の中で何かが激しく燃える。それに伴い、俺に集まっていくマナが赤く染まつてい

「はああああああああああああああ!!!」

マシユの綺麗な髪が、ほんのりと赤く染まつていく。俺の魔力の影響だろうか？
隅っこでそんなことを考えながら、目の前の闇へと俺たちは一步踏み出す。

「なんだと！？
なら！
はあつ！！

グンツ！
と、闇の勢いが強くなる。だけど、そんなことでは止まれない。

マジカル・ページ

「はい！先輩！」

盾を構えたまま、二人で闇を押し返しながら走る。前へ！ 前へ！ まだ前へ！

「俺達／私達は！ こんなもののじや止まらない！」

ラウンドシールドが真っ赤に光る。

そのまま、セイバーの放つ闇を押し切り、セイバーを弾き飛ばした。

「馬鹿な!? ぐあつつ！」

『嘘だろ？！』

「やるじやねえか！ マスター！ お嬢ちゃん！」

「ありえないわよ……」

「フオー———ウ！」

弾かれたセイバーが弾丸のように吹っ飛び、大聖杯の下にある台座へと突っ込む。派手に上がった土煙がセイバーを隠してしまう。

「やつた！」

「いえ、感触が軽かつたです。恐らく直撃する前に後ろへ跳んでいます」
『マシユの言う通りだ。もう一発来るぞ！』

マシユがふら付きながらも盾を構える。

「大丈夫」

「先輩……」

「エクスカリバ・モルガン
煙が晴れると同時に、チャージを終えたセイバーが聖剣を振り上げた。
約束された勝利の剣！」

「まばゆい反射／Dazzling Reflection」！

牡鹿のような角をはやしたライオンの幻影が闇の前に現れる。それは闇を吸収し、暖かな光となつて俺に降り注いだ。体の奥から活力がみなぎつてくるのを感じる。

『まだだ！』

セイバーは大聖杯から魔力のバツクアップを受けている！ 次が来るぞ

「次はないさ。キヤスター！」

「そういうこつた！」

令呪がさらに輝く。アーチャーの時とは比べ物にならない量の魔力を全部つぎ込んで、無理矢理に靈基を格上げしたキヤスターの宝具が放たれた。

「燃え尽きろ！ 焼き尽くす炎の檻ツ!!」

注意が完全にそれていたことがあつて、一瞬反応が遅れたセイバーにとつて、それを躱すのは困難だったが、躱せない訳ではなかつた。巨人の腕を見切り、躱して斬りつける。しかし、傷一つ着かない巨人の腕から炎が伸びてセイバーを捕えた。

「この程度の炎など！」

炎を振り払うことに気をとられたセイバーの直感が危機を告げた時、既にマシユは懷に潜り込んでいた。だが、それでも騎士王は、セイバーはその突進を受け止めた。

「残念だつたな！」

「そつちがな！」

盾の影から飛び出したのは、もう一人のキヤスター。いや、正確には違う。よくよく見れば目に光がない。

「もう一人の自分／Altered Ego」

こいつは魔力を込めた分だけ強くなる分身だ。^{コピー}セイバーには呪文が通りづらいことを、キヤスターに聞かされていてことで思いついた。もつと強い奴を呼び出せばいいという事だ。

コピー・キヤスターの杖が槍のように鋭く、セイバーの心臓を貫く。それと同時に、セイバーから力が抜けた。

「無茶苦茶だな。マスターがサーヴァントと共に突っ込んだり、サーヴァントの靈基を魔力で補つたり、あまつさえ私に止めを刺したのが三重の罠の上にサーヴァントですらないときだ」

「ああ、こいつは俺が召喚したクリーチャーだ。英靈にだつて劣らない、仲間だ」

「フツ、まあいいさ。私も所詮はここに縛られたサーヴァントに過ぎない。気を付けるがいい、規格外なマスターよ。聖杯を巡る戦い、グランドオーダーは、聖杯を巡る戦いはまだ始まつたばかりだ」

そう言い残して、セイバーは消えてしまつた。振り返ると、キヤスターも消えかかっていた。

「チッ！ セイバーの奴言いたいことだけ言つて消えやがつた。じやあなマスター、次はランサーで呼んでくれや」

そういうつてキヤスターも消えていつた。



「先輩！ お怪我は？」

「マシユこそ、大丈夫？」

マシユの手には水晶体が握られていた。それを見て所長もこっちは駆け寄ってきた。

「所長、無事でしたか」

「貴方が無茶苦茶してくれたおかげでね、ともかく、これを回収してカルデアに戻りましょう」

「残念だが、そうはさせてあげられないね」

聞き覚えのある声を聴いて振り向くと、そこにはモスグリーンのタキシードとシルクハットの男がいた。

「レフ！ 来てくれたのね！」

レフ・ライノール。カルデアの魔術師で、マシユの次にカルデアであった人。温和な

笑みが浮かべているが、灯が覚醒した今、改めてレフを見た時に感じたのは、クリーチャーの気配だった。

「ダメです！ 所長！」

「何をするの！ 放しなさい！ レフが来てくれたんですもの、もう大丈夫よ。ね、レフ。そうでしょう？」

所長は気付いていないみたいだけど、マシユも違和感を感じ取つたみたいで盾を構えて所長の前に出た。

「マシユ！ 貴女まで！」

「所長！ 先輩の言う通りです！ レフ教授からはよくないものを感じます！」

レフは一度天を仰ぐと、こちらを睨みつけてきた。その顔に笑顔はなく、まさに悪魔の顔をしていた。

「どるに足らない子供とデミ・サーヴァント風情と見逃していたのが仇になつたか。まさかそのような躍進を遂げるとは思つてもみなかつた」

「レフ？」

レフの手から凝縮された呪いの弾丸が飛び出した。マシユが構えていなかつたらば所長は消え去つていただろう。

「ファン、亡靈風情を庇うか。デミ・サーヴァント」

「何を言つてるのよ！ レフ！」

「マリー、私はねえ、君の真下に爆弾を仕掛けたんだ。君の体は既に木端微塵に吹き飛んで、君の存在は謂わば残留思念、亡靈に過ぎない」

マシユの手から水晶体がレフに向かつて飛んで行く。咄嗟のことについつけず、水晶体はレフの手に渡つてしまつた。

「君は死んで、初めて欲しいモノが手に入つたんだ！ 喜びたまえ！ 最もこの特異点が崩壊すると同時に君は消えてしまうがね。しかしそれではあまりに、忍びないだろう？」

風景が切り替わる。そこはカルデアの管制室だつた。

「嘘でしょ……？ なんでカルデアスが真っ赤になつてゐるの？ ねえ、レフ、あれは偽物なんですよ？」

「本物さ、聖杯を使えば時空を繋ぐことだつて容易なんだ。君の為に特等席を用意したんだから、せいぜい絶望してくれたまえ」
所長が混乱しているうちに、宙に浮いた。

「動くなよ、藤丸立香にマシユ・キリエライト。一つでもアクション起こせば先に君たちの首が圧し折れるぞ」

所長が徐々にカルデアスに近づいていく。動こうにもレフがこちらを凝視していて

動けない。

「さあ、君が起こした悲劇の結末は、君の命でも贖いきれない大罪だ。だからせめて、力ルデアスに飲まれて少しは罪を贖うといい」

「う、嘘よね！ あれは高密度の情報体、次元の異なる領域なのよ!?」

「ブラックホール、いや、太陽かな？ どちらにせよ、人間は分子レベルで分解される地獄だな。さあ、無限に苦痛を味わいながら、死んでいくといい」

「させるか！」

「動くなと言つた！」

レフから放たれるガンドの嵐で、身動きが取れない。

「先輩！ 私が行きます！」

「ならば先に君のマスターから殺すとしよう！ いい加減目障りだ！」

マシユの動きが何かに絡め取られたように固まる。

「くっ！ お、重い！ 何かに圧し掛かれているみたい……!! 先輩！ 逃げて下さい！」

「マシユ！ くそつ！ こうなれば一か八かだ！」

マナを絞り出そうとしたとき、さつきまでどこかに消えていた鉄の梟が飛び出した。

「ローザさんの梟……？」

「何かと思えばこんな鉄屑如き！」

レフのガンドの弾幕が鼻を襲う、しかし鼻は戦闘機も真っ青な軌道であつという間にレフに肉薄した。

「小癩な！」

レフの振るつた腕が鼻に当たると、鼻の嘴がレフの腕に突き立つのは、全くの同時だつた。

「他愛のない……では、改めて藤丸立香を……、ごぼつ!?」

レフの口から大量に血が噴き出された。それと同時に所長が落ちてくる。

「きやあああああああ!!」

「所長！」

すぐさまマシユが所長を受け止め、俺はレフに向かって呪文を打つ準備を整えた。しかし、周りのマナはさつきの戦いでほとんど枯渇しており、今唱えられるのは「ショック／Shock」が精一杯だ。

「おのれえ……何をした!!」

「知りたいか?」

レフの背後に誰かが立っている。いつの間にかいたその人物は、不敵な笑みを称えたグラマラスな美人。

「ローザさん！」

「おう、無事かね藤丸君、マシユちゃん、あと所長ちゃんにフォウ君！」



いやー、バーサーカーは強敵だつたな。処理に時間がかかってしまった。それはさておいてだ。

目の前で悪意の大梟から戦闘ダメージ貰つた謎のデータモンがこつち睨んでるんだけど、悪意の大梟が反応したつてことは敵か。

「さて、なんで君が現在進行形で死に向かっているかというとだね。悪意の大梟にはある特殊な能力があるのだよ、我々は似たような能力を全部ひつくるめてこう呼んでいる。触れるだけで相手を死に誘う能力——即ち、【接死】とね」

だが、もみあげのすごいデータモンはどこかへ消えてしまつた。死んだことで戦場を離れたというよりかは能力で一度死んでからどこかへ帰つた感じだ。

「不覚をとつたが、まあいい。どちらにせよ人理焼却は既に成され、未来は確定した！震えながら絶望し続けて死ぬがいい！」

存外元気だなあのデーモン。

気になることがいくつか出てきたが、まずは所長ちゃんの状態を改めてチェックしよう。私風に言えば今の所長はスピリットだ。

「とりあえず話は聞いているさ。さつきのデーモンがペラペラしゃべっていたのをね。要は肉体が元通りになればいいんだろう？」

そう言い残し、一足先にカルデアとやらへプレインズ・ウォークする。座標はさつき時空が繋がったときに記録した。そこで所長の物と思われる僅かな肉片を見る。見事に木端微塵だ。

「あちやー、これはちょっと過去からやり直すか。ほい【一日のやり直し／Day，s Undoing】

現れた無機質な門をくぐると、丁度二十四時間前ぐらいのカルデアにひよいと私が入り込んだ。

「ほんじゃ、ばれる前にちよちよいつと所長ちゃんに【再生／Regeneration】つけて、一日待つてもう一度ここに来ると」

そして一日が過ぎる。

「はい、時間通りにやつてきました。丁度私が一日のやり直しを唱えた直後だな。ほれ、再生能力起動」

みるみる間に所長の肉体が再生されたが、生憎魂はスピリット化しているため、このままじや動かない。どちらにせよちょこつと死靈呪術ネクロマancyかじつてれば肉体に魂を憑依させることなど容易い。そんなことを考えて言ううちに所長が目を覚ました。どうやら手助けするまもなく肉体に還ってきたようだ。

「目覚めはどうだね？　肉体は私がちょっと過去まで行つて再生させたよ」

「……もう何も言うことはないわ」

あちやーだめだ精神的に参っちゃつてる。徐々に回復を待つしかないか。どうにもこの人理焼却とやら、かなり長い時間がかかりそうだ。

「さてさて、ここまで関わつてボーアイヤ後味が悪い。最後まで付き合つとしますか」とりあえず私は、今頃帰つてきているであろう藤丸君達の元へ向かつた。長くて短い、とても大切な一年が始まりを告げたのだつた。

カルデアにて／Interlude

カルデアに帰ってきてから数日が経つた。カルデアではあのデーモン、レフが起こした爆弾テロによつて人員が大幅に激減、おまけに機材が損傷し、その修理の為に必要な資材もギリギリで、カルデア以外の場所からそれらの確保すら難しい状況だ。

故に、私の協力でカルデアに改造が施された。これには所長のオルガマリー、医療班トップのロマニ・アーキマン、そしてカルデアに召喚されていたサーヴァント、ダ・ヴィンチちゃんことレオナルド・ダ・ヴィンチの立ち合いの元に私が大量のアーティファクトをもたらした。

発火器具、検査器具、改良器具、商人の荷運び、歩行貯蔵器、万能溶剤、警戒自動機械、溶接自動機械、作業場の助手、多用途な一品、製造機構、電招の塔、抽出機構、活性機構、靈氣貯蔵器。これらをカルデアに設置することで電力の補助とした。幸いカルデアの外はマナと靈気が荒れ狂う状態だったので靈気はすんなり集まつた。そしてこれらの運用はダ・ヴィンチちゃんに一任している。概要を軽く説明しただけで全ての使用方法や管理方法を習得した彼女（後に実は男性だったことを聞く）は自称通り天才だ。最も私もよく分からん部分があるから、相応のクリーチャーを召喚し、顧問にしている。

そういうた背景もあって、カルデアの修復は急ピッチで進んだ。なにせカラデシユから呼び出せるドワーフをはじめとした職人たちのクリーチャーを総動員して行つたのだから、むしろ当然だ。

食料も私が昔創造した私専用の食料庫兼保養地の次元から持ち出せる様、ゲートを繋いだ。ゲートももちろんアーティファクト。その昔ファイレクシアが用いた侵略用ポータルをそつくり再現してみたが、これが意外にもちゃんと稼働した。もちろんファイレクシアの奴等に察知されないよう細心の注意を払っている。

因みにこれを見た所長は卒倒し、ロマニは腰を抜かしてしまった。私もこんな骨董品引っ張り出すことになるとは思つていなかつたが。

その他にも変化が結構あつた。藤丸君がサーヴァントを召喚している。戦力拡充を狙つてのことだ。システム上、サーヴァントを強化する礼装も吐き出されるうえに、呼ばれる英靈はランダムなので誰が来るか分からぬ。そんな中藤丸君が呼び出したのは3名のサーヴァントだつた。

「アルスターのクー・フーリン。ランサーだ、ひとつ、よろしく頼むぜ」「アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎。ここに参上つかまつた」「召喚に応じ参上した。貴様が私のマスターという奴か？」

青い髪のランサーに、なんか長い刀を持った侍、そして藤丸君と鬭つたという黒い女

性剣士。彼らもすぐに私の魔術書に記録した。

アルスターのクー・フーリン

②R R

伝説のクリーチャー——人間・サーゴアント

5 / 4

先制攻撃

アルスターのクー・フーリンがアンタップ状態である限り、これは呪禁を持つ。

③B : ターン終了まで、このクリーチャーは接死を得る。

佐々木小次郎

②B

伝説のクリーチャー——人間・サーゴアント

4 / 4

このクリーチャーはブロッカされない。

各戦闘の開始時、これは到達を得る。

飛行を持つクリーチャーと戦闘をした際、これは二段攻撃を得る。

③・飛行を持つクリーチャー1体に、点数で見たパワー分のダメージを与える。（これは戦闘時のみ使用できる）

アルトリア・ペンドラゴン・オルタ

③BW

伝説のクリーチャー——人間・サーヴァント

6／5

呪禁

②W：このターン、このクリーチャーへのダメージを軽減する。

③B：このターン、戦闘に参加したあなたのコントロールするクリーチャーは+1/+0の修正を受ける。

なんだこいつら、強いな。使い勝手はあまりよくないが。うーん、一体一体の性能が破格すぎて大量展開ができないのか。しかもまだまだ本調子ではないらしい。

これはカルデアの召喚システムの仕様であるが故、致し方ない。特別な素材を用いて靈基を強化しなければならないのだとか。しかし、この問題は藤丸君がPWへと覺醒し

たことにより幾分かの解決を得た。藤丸君が持つ魔術師としては破格どころか市場が崩壊するレベルの莫大な魔力で再召喚を行うことで、宝具の強化と英靈の持つスキルも同時並行で靈基を強化した状態で召喚が可能になつたのだ。もつとも本調子である一歩手目くらいまでしかできないが。これも本来ならば有り得ない事であり、私込みで封印指定待つたなしだとか。

といつても、私や藤丸君が使う魔術は文字通り異次元の物、おいそれと解明はできな
いし、何よりこの世界では燃費が悪い。

そうそう、所長もじつは死んだショックと過去を改変されたせいか、はたまた元々灯
があつたのだろうかPWとして覚醒していた。だが、実力としてはティボルト以下だ。
この子メンタルが苗木トークンなんだもん。初期忠誠度1て、ないわー。

カルデアの所長、オルガマリー

UR

オルガマリー・アニムスフィア

+1：対戦相手を一人選ぶ。そのプレイヤーはクリーチャーを一体タップする。
-3：占術3を行う。その後カードを2枚ドローする。

—9：貴方はライブラリーから30枚カードを追放する。その中から好きな数のクリーチャーをマナコストを支払わずに唱えてよい。その後、追放したカードをライブラリーに加え、シャッフルする。

ん？　ん？　強い？　まあでも使わないと思う。それこそ専用に魔術書組む必要でるし。まあ、こんなことは置いといて、今の藤丸君の状況を軽く教えておこう。今はサーヴァントたちと共にシミュレーターを用いた訓練を行いながら肉体改造、そしてダ・ヴィンチちゃんから魔術の講義、そして私からPWとしての戦術の組み方や魔術書の編集、そしてPW式の決闘を行つてている。ハードスケジュール故にロマニが徹底的なメディカルチェックを行い、藤丸君の体調を万全なものにするサポートをしている。

私はそれ以外では私の次元から持ち込んだ食料のチェックや、サーヴァントたちの鍛錬のためにクリーチャーの召喚——もちろんこれは私の次元で行つている——、必要物資や強化素材集めに精を出している。

あ、あとちょっと余計なこともした。まあ、有体に言えば私が興味本位で英靈の召喚を行つてみたのだが、これがとんでもないことになつた。

「俺はジエイス、ジエイス・ベレンだ。君に力を貸そう」

なんと、かのゲートウォッチを呼んでしまつた。恐らくだが、私が召喚を行うとPW

が呼び出せるみたいだな。もれなく全員キヤスター枠確定なのが何ともいえないのが。しかもこのPWサーヴァントもPWの力のほんの一部を無理矢理形にして押し込んでいる所為で、全力とは言い難い。が、強力な味方を得ることが出来た点は好ましい。一応、藤丸君に契約させた。彼は青呪文の専門家とも言えるからな。

ジエイス・バレレン、おそらく最強のテレパスであり、幻影魔術の達人。精神を刻むもの、記憶の熟達者、ヴリンの神童などの異名を持つ魔術師だ。PWでは珍しく割と善人なので、安心してほしい。彼の幻術は嗅覚すら欺き、彼の生み出した幻はクリーチャーとして魔術書に記録される程に精巧だ。そして一時的に記憶を共有することで武術の達人のような動きができる。そして彼の真骨頂はテレパスにある。相手の記憶を破壊し、相手の心を彫刻のように作り変える事すら可能なのだ。最も本人があまりこれを使うつもりはないらしいが。

こうして、藤丸君の成長とともにカルデアも徐々にその機能を回復しつつある。しかし、コフィンで冷凍保存されているマスターたちはまだ目覚めさせることはできない。仮に目覚めさせて全員を治療したとしても、それをサポートするだけの人員もないのだ。藤丸君には申し訳ないが、カルデアの最後のマスターとして戦つてもらわねばならない、そうロマニが嘆いていた。

そして、レイシフトによる聖杯探索は間もなく発令される。その先に待つ結果を見届

けるために、私はこの次元に残っている。なにより、ここで過ぎすうちに情が移つてしまつた。長居をし過ぎた物だと思う。

第一の特異点発見の知らせは間もなくだつた。

フランス／France

メキメキと実力をつけていく藤丸君とマシュー、それに連携を密にするべく訓練するサーヴィアント達。藤丸君も彼らと友好的な関係を築いていっている。私も彼には結構懐を許してしまっている。人たらしの才能でもあるんじやないだろうか？

「私の機嫌を取るな」ツンツン

が、いつの間にか

「特別に……そなたを我が主と認めてやろうではないか……」テレテレ

デレッデレってレベルじやねーぞ!? マシューも地味に警戒感をあらわにしている。

無論私はその様子を見てダ・ヴィンチちゃんと一緒にニヤニヤしている。趣味が悪い?
 PWカードゲームにそんなこと言つたところで無駄だぞ? 私が知るPW達は皆が皆、愉悦の塊みたいな精神している。具体的には3ターン目に永劫エムラが飛び出して来たり、突然ババ抜き始め出していつの間にか勝ち宣言しだしたり、特定の呪文がないだけで負け確を宣言されたり、無限コンボでハメ殺したり、やりたい放題だ。人のこと言えるのかつて? 軽く億単位でゾンビ・トーケン並べて先制攻撃と警戒と飛行と接死持たせちやいか

んのか？

そんなことをしている間に、ロマンから招集がかかつた。前にジエイスと何か話していた時は顔が真っ青だったが何を話していたんだろうか？

「えーっと、最初の特異点が確認された。場所はフランスだ」

説明を引き継いだ所長が言うには、1431年のフランスに観測された特異点、その

調査及び修正と聖杯の探索が任務となる。

「特に立香君。死なないでくれ。重荷を背負わせるようで申し訳ないんだけど、君が人類最後のマスターだ」

しかし、藤丸君の眼に怯えはない。

「大丈夫です。先輩は私が守ります！」

マシューも気合十分といつた感じだ。

「ローザも、藤丸君をよろしく頼めるかい？」

「ここまで面倒見てきたんだ。最後まできつちり面倒は見るさ」

レイシフトの為に私以外の者がコフィンに入していく。私は藤丸君がいる場所に向かってプレインズ・ウオークすればいいのでこのままオペレーター室にいる。……どうやら無事に着いたらしい。私も向かうとしよう。



フランスへレイシフトした俺たちは、武装した兵士に取り囲まれた。応戦もやむを得ないという状況でジェイスさんがスッと手をかざした瞬間、武装した兵士たちはみんな眠つてしまつた。

「ジェイス、今のつて……」

「心配ない、少し精神に作用する魔術で眠つて貰つただけだ。数秒で目覚める。ついでに俺達への敵意も消しておいた」

そう言い終わると同時に、兵士たちが目を覚ました。言葉が通じるか心配だったが、カルデアの謎技術でそのへんは心配ないらしい。

兵士たちはこの先にある砦へ逃げてゐる真つ最中だつた。戦争は休止してゐるはずだが、竜の魔女が甦つてあちこちで大暴れしてゐるらしい。この兵士たちも竜の魔女が率いる軍勢に襲われて這う這うの体で逃げ出してきたんだとか。

「見えてきた……あそこがそうだ」

そこはすでに砦と呼ぶには苦しいほどに損壊してゐた。あちこちに焦げた跡や何か鋭いモノでひつかかれた跡がある。すこし奥の方ではいくつもの簡素なお墓が並んでいた。

竜の魔女は竜を操るらしい。こここの砦を度々襲撃してきているのもその竜の魔女の手先、その先兵に過ぎないのだとか。兵士たちは疲労が溜まりに溜まり、いつ死ぬかもわからぬ悲壮感に包まれていた。

「敵襲だー！」

その声につられて上を見上げると、何体ものドラゴン……いや、形状が違う。確かにあれはドレイクとかワイバーンとか言うタイプのクリーチャーのはずだ。

ワイバーン・トーケン

2 / 2

飛行

真っ先に動いたのはアサシン、佐々木小次郎。本人曰く、佐々木小次郎本人ではない

らしい。けど、空を飛ぶ敵に対して一番有効に動くことが出来るのは彼だけだった。
到達の能力を持つクリーチャーは、飛行を持つクリーチャーをブロツクすることが出来る。主に緑のクリーチャーがこの能力を持つことが多く、緑の弱点をカバーしている。

「先輩！ 指示を！」

「マシユとジェイスは俺と一緒に！ オルタとクー・フーリンにはいまから強化を施す！ あとは暴れてきてくれて構わない！ 小次郎も無茶はしないで！」

オルタとクー・フーリンに【グリフの加護／G r y f f, s B o o n】をエンチャントし、ジェイスとマシユと一緒に砦の淵へ上る。輝く羽をはやしたオルタとクー・フーリンは戦闘機も真っ青な空中機動でワイバーンの羽を斬り裂き、心臓を穿つていく。小次郎は斬ったワイバーンを蹴つて次のワイバーンに襲い掛かっていく。

「マシユ、防護を」

「了解です」

ワイバーンの吐く火球や爪をマシユが防いでくれる間に、俺とジェイスで補助呪文や迎撃を行う。

【鑽火の輝き／I m m o l a t i n g G l a r e】！

「こい、【浮遊障壁／H o v e r B a r r i e r】。そこの兵士はさがれ、【眠りへの誘

i／Send to Sleep】

突っ込んでくるワイバーンを撃ち落とし、兵士に襲い掛かるワイバーンはジエイスの召喚した青い壁に阻まれ、いくつかのワイバーンは眠りに落ちた。

「出ろ！【絡み爪のイトグモ／Hitch claw Recuse】！」

ローザさんが新しくくれた魔術書から得た呪文を使う。脚の先が鉤状になつた蜘蛛が糸を飛ばしてワイバーンを絡め取る。倒すに至らなくてもワイバーン達にとつては新しい脅威だ。

「待たせたな藤丸君！【薦の罠／Vine Snare】」

ローザさんの声と共に無数の薦がワイバーンを絡め取つていく。

「生憎私の戦場に兵士どもはいない。誰かは知らんがワイバーンのコントローラーよ、残念でした」

地面に縫い付けられ、口を塞がれたワイバーンと何故か巻き込まれてる小次郎。

「あ、小次郎パワー4だつたわ。忘れとつた」

「ローザさん！？ 小次郎、ちょっと待つて！【撃碎確約／Built to Smash】！」

目に紅い光を宿した小次郎が薦を引き千切つて立ち上がると、縫い付けられたワイバーンをすごい勢いで切り刻み始めた。怖い。

「天上天下念動爆碎剣！」

「そんな名前の宝具じゃないでしょ！」